

大谷地区製錬所跡

コケに覆われた岩壁には、丸い穴や不自然に滑らかな表面、斜めに深く切り込まれた跡が見られる。人の手が残したこれらの跡は、石見銀山を中心に発展した高度に専門化された経済の重要な結節点であった、かつて銀の精錬所であったことを示す痕跡である。精錬所は、徳川幕府（1603-1867）の機関である、銀山を監督していた代官所によって 1700 年代半ばからここで運営されていたと考えられている。切り込みは鉱山労働者が山腹を直接掘って銀鉱脈を掘り当てた「露頭掘り」の跡で、この場所では銀鉱脈は地表に近いところにあることが多かった。

このような精錬所は高品質の銀を大量に生産するための鍵だった。鉱山から運ばれてきた鉱石はまず砕かれて、小さくなった石をふるいにかけて、銀を含む部分を選別した。そして、灰吹（はいふき）という精錬方法で処理された。銅を含む銀鉱石を鉛と一緒に製錬することである。銀は鉛と結合し、合金を形成する。この合金を灰の上に置き、酸化させないように人力送風装置を使って 850℃にもなる高温まで加熱する。合金の他の元素は溶けて灰に吸収され、純銀だけが残る。大谷遺跡の周辺で、この工程でできた副産物が発掘されている。

ここで精錬された銀は、政府の金庫へと長い旅を始めた。大森の代官所まで運ばれ、そこで銀の純度を量り、数量を記録した。その後、銀は陸路で尾道の港に運ばれ、そこから海路で大坂、江戸へと運ばれた。